知事広聴（賀茂地域）議事録

開催日時：令和８年９月 15 日（火）15 時 20 分から 16 時 30 分
会　　場：静岡県下田総合庁舎　２階　第３会議室
出 席 者：鈴木知事、県民７名

（広報戦略課長）
本日はお忙しいところ知事広聴にご参加いただき、誠にありがとうございます。私は本日の進行役を務めます、県広報戦略課長の金田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
これより着座にて進行させていただきます。失礼いたします。
最初に、ご留意いただきたい点を申し上げます。本日の会議録及び動画につきましては、後日個人情報を除くなどの編集をした上で、県ホームページにて公開いたしますので、あらかじめご了承願います。また、発言内容によっては、担当職員が補足説明をさせていただく場合がございます。それでは開会にあたり、知事からご挨拶を申し上げます。

（知事）
はい。それでは本日はですね、この賀茂地域の、さまざまな分野でご活躍している皆様に、ご多忙の中、この知事広聴にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。
この知事広聴でございますけれども、県内の各地でですね、開催をして、その地域で様々な活動をしたり活躍をされている方から、その体験でありますとか、ご意見を伺って、それをですね、県のいろんな施策に活かしていこうということで、こういうですね車座形式で、ざっくばらんに語り合おうと、こういう形式でですね、令和 6 年度から実施をしております。
こうした知事広聴の中で、いくつか我々も気づきがありまして、県の施策にですね、活かされていることもあります。例えば、以前にですね、県の防災訓練、９月１日にやってたんですけども、なんで９月１日にやるのと、もう夏の真っ盛りで、熱中症でみんな大変やないかと、いうことで、確かにそうやなと。防災の日っていうのは９月１日なんで、どうしても行政はそういう時に防災訓練やろうということで実施してましたけれども、別にその日でなくてもね、もっと涼しくなってからでいいんじゃないかということで、今時期をずらしまして、いい気候の時に、防災訓練をやるようにしたとかですね。
昨年、地域おこし協力隊の方から、県内いろんなところで活躍してるんですけども、その状況がわかんないと。横のつながりもないということで、それもそうだなということでですね、それぞれの皆様の活動と連絡先を載せた事例集を作ったりですね、成果発表会をやって、横の交流を促進をする、こんな取り組みも始まりましたし、また富士登山の、富士山の登山、山梨県側と静岡県側、開山日が今まで異なってたんですね。特に須走口と吉田口の方は、８合目で繋がってるもんですから、静岡県が遅れて開山日を迎えるとですね、色々不都合があったんですけども、今年から７月１日に統一をいたしまして、非常にスムーズに登山が行われるようになり

ました。これも現場からのご提案をいただいたことでございます。
こうした皆様からのいろんなご提案を、ぜひ県の施策にも活かしていきたいなというふうに思っております。今日は限られた時間ではございますけれども、ぜひ忌憚のないご意見を賜ればというふうに思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。それでは次第に沿って進めさせていただきます。
最初に本日ご発言いただく皆様をご紹介いたします。本来であれば、お一人お一人ご紹介したいところではございますが、お時間に限りがございますので、お手元にある資料の配布にて代えさせていただきます。
それでは、知事との意見交換を行ってまいります。私からお名前を申し上げますので、着席のままご発言をお願いします。概ね 2 人、または 3 人の方から活動内容のご報告など伺った後に、知事からご回答いたします。ご発言はお一人 6 分から 7 分程度でお願いいたします。それでは最初に、A様、お願いいたします。

（A氏）
はい。では着座にて失礼します。松崎町から来ましたAと申します。私は 5 年半前に、横浜から移住をしてきまして、実は第一志望は河津町に移住することが希望だったんですが、河津町に物件なく、下田に物件なく、南伊豆に物件なく、縁もゆかりもなかった松崎町に流れ着いたという経歴を持ってまして、ちょっと変わった働き方をしております。
資料の一番上に書かせていただいた通り、都内で 20 年間勤めてまいりましたので、都会と町の架け橋になるような、地域活性化につながる中間支援ですとか、地域のコミュニティ形成のための、マルチワーカーとして奔走しています。
いくつかあるうちの今日は 3 つお話をさせていただきますが、一つは、特定居住支援法人、一般社団法人風土舎（かぜとつちしゃ）、別名というか松崎町では伊豆松崎・田舎暮らしサポート隊という活動をしているんですが、これはユニークな点としては、町民有志が移住相談を町民目線で受けると。なのでいいことも悪いことも全てちゃんと検討者にお伝えした上で、来てもらえるようにということで、参加メンバーの中には農家さんもいますし、僕みたいな個人事業主もいますし、お母さんもいますし、いろんな立場から町のいいところ、悪いところをちゃんとお話をするということで、最初は移住相談だけだったものを、今は 2 拠点、それから関係人口の創出として活動を行っております。
2 番目、海浜BASE（かいひんベース）と書かせていただきましたが、つい 8 月の 12 日なんですけれども、松崎町にあった老舗旅館を事業継承しまして、そこを宿泊だけではなくてコミュニティラウンジですとか、ワーキングスペース、レンタルスペース、チャレンジシェアキッチンを合わせ持つ複合施設としてオープンをさせました。ここは子供合宿みたいなこともあれば企業研修もあれば、元々会所と言われる郷宿として江戸時代から存在していた宿でしたので、町の集まりみたいな

ことも含め、すごい末端な例で言うと、こないだは RIZIN のペイパービューをみんなでアルコールとおつまみを持って、みんなで鑑賞する会みたいなこととかもやりながら、地域のコミュニティのお手伝いをできればなというところでこういうものをオープンさせています。
3 番目、NPO 法人西伊豆みらい創造とありますが、松崎と西伊豆はもうほぼほぼ経済圏が同じという中で、西伊豆のメンバーと一緒に NPO を立てまして、去年は観光庁のガストロノミーツーリズムの造成事業というものを実践してまいりました。
ポイントは生産者と飲食事業者さん、それから宿泊事業者さんを有機的に繋げるということで、ツーリズム観光客だけではなくて、それをやることで都会のシェフですとか、海業（うみぎょう）の視察企業みたいなものと向き合って、取り組みを推進しております。
駆け足でお話ししましたが、松崎町は静岡県で一番人口の少ない町というところで、急速な過疎を前提として、今僕の立場から町に必要だと考えてること、という意味で言うと、実務を伴う中間支援企業、スタートアップ企業と書かせていただきましたが、僕は勝手にそういった方々のことをブースターと呼んでます。漁業をやってる方も農業をやってる方も飲食やってる方も、その道のプロではあるんですけれども、それをどうやってブーストさせるかっていうお手伝いができる人材っていうのが、それが本業じゃなくてもできることっていうのがあると思うので、そういったところに何かしら接点ですとか、町として支援ができるようになるといいんじゃないかなと。
あとは移住定住をやっておりますとやっぱりここの問題にぶつかるんですけども、やはり空き家が物理的にはありますが貸す家がないという問題がありまして、なので例えばですけど東京がやってるような政策課題解決型みたいな支援みたいなものがあるとより少しずつ進んでいくんじゃないかなというふうに思っています。その話に関連すると、一番はやっぱり町民の方々の意識っていうものが一番大事だと思っていて、やっぱりあったら年に 1 回とか 2 回家族が親族が来るから空けとこうみたいなことで、それが原因で結構移住相談でお断りして、お断りというか諦めていただいている方が結構多いので、それを解消するだけでだいぶ年に 10 人以上は変わってくるんじゃないかなというふうに思っています。
あとは僕自身が今次に向き合おうと思ってるのが子育て支援事業ということで、これもそこが本業じゃなくても、副業というか副業的に何かそういうことをお手伝いできる仕組みができたらより町が盛り上がっていくんじゃないかなというふうに思っている次第です。
駆け足ですが、以上となります。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。次にＢ様お願いいたします。

（Ｂ氏）
下田防災クラブIMAGINE（イマジン）のＢと申します。静岡県の防災士、それから静岡県ふじのくに災害ボランティアコーディネーターの認証を受けております。

下田防災クラブIMAGINE（イマジン）は、2025 年、去年の 5 月に立ち上げた民間ボランティアになりまして、賀茂地域の子供と子育て世代を主対象とした防災啓発活動を行っております。メンバーは子育て世代の母親 4 名で構成しております。

団体としての活動は本当に 1 年半と短い期間なのですが、これまで賀茂地域の災害ボランティア関係の団体の皆様、それから県や市、防災関係の皆様、それから社会福祉協議会、その他にも子育て支援関係の皆様など、本当にたくさんの方のご協力を得て、今日まで活動することができました。今日ここに私が座っていられるっていうのは本当にこういった皆様のおかげであるということをまずはお伝えしたいなというふうに思っております。

活動としては、下田防災クラブIMAGINE（イマジン）は楽しいイベントを通した防災啓発活動というのを行っております。防災を楽しむ、ゼロの意識をイチへということをモットーにしておりまして、防災に対するハードルをですねこれを下げて、私たちだからこそできる参加者と同じ母親目線からの防災啓発活動というのを行っております。

そして 2 つ目に大切にしていることが、様々な団体や機関とのコラボです。いざという時、共助、共に助け合うということ、これが防災においてとても大切になりますので、平時からたくさんの団体と手を組み、地域の横の手を広げていくことにこだわってコラボイベントというものを開催しております。

活動実績の方は資料の裏面とその隣のページをぜひご覧いただけたらと思います。御覧のようにですね、この 1 年半コラボイベント、講話、参画、他団体への協力と、かなりの数の活動をすることができました。今まで賀茂地域に私たちのような団体がありませんでしたので、ありがたいことにとても注目をしていただきまして、残りの下半期も 3 月まで活動予定が埋まっているという状況であります。

実は、直近でですね、9 月の 12 日の土曜日、伊豆下田よいよい夜祭りという大きなイベントに出店させていただきまして、こちらで熊本支援のブースを展開しました。消防の、これ実際に持ってきたんですが、これ消防の廃棄されるホースなんですね。こちらをキーホルダーにして、このストラップもつけて、お子さんにこちらに絵を描いていただくという形で出店をしました。皆様すごく喜んで作っていただいたんですが、こちらの体験料 300 円と募金箱の金額合わせまして、7 万 7,695 円、こちらを義援金として全額熊本支援として寄付させていただくことができました。今回、楽しくっていうテーマと、それからホイッスルの大切さを伝えるということ、また支援ということで、本当に私たちらしく、そういった形の活動となったのではないかなというふうに自負しております。

一つ問題点を挙げるとなりますと、私たちボランティア団体ですので、基本的に利益を上げるということができません。じゃあボランティア団体どのように運営するのと言いますと、参加者からの参加費の徴収、それから助成金、寄付といった 3 つが大まかなところになります。我々も今年度は、公益財団法人さわやか福祉財団様と赤い羽根共同募金様より助成を受けて活動をしておりますが、実態は問題が山積みでして、まず防災啓発活動に対する助成金というのが全国的に見ても非常に少ないです。我々が大切にしているこのコラボというところがですね、

助成の対象外というものがほとんどになってまいります。
ボランティアなので好きだからやってるんでしょうと言われればそれまでではあるんですが、やはり活動となるとお金がどうしても必要です。もうほんとにコピー1 枚、チラシを配布するとか、会場借りるですとか、もう様々なことに皆さんね、経営者の方もいらっしゃると思うので、おわかりかと思いますが、動けば動くだけお金がかかるという現状です。来年度の運営資金の目処も今立っていない状態ですので、現在の 1 番の課題は資金集めだなというふうに感じているところです。
ただ活動自体には非常に手応えを感じておりますので、私たちも楽しみながら今後も一人でも多くの方に防災の大切さを伝えていけるように、長い目で見て活動をしていきたいなというふうに思っております。
最後に県政への提言のお時間いただいてますので、資料最後のページをぜひご覧ください。一番下のフラッグの写真になるんですが、こちら鎌倉小町通り商店街に掲げられている防災フラッグです。鎌倉小町商店街、防災普及学生団体Genkai（ゲンカイ）、それから鎌倉市、この 3 つの産官学が協力して作成したものになります。
鎌倉の小町通り商店街は命を守る商店街を目指してまいりますというふうに宣言されています。ここ賀茂地域も、やはり観光客ですとか外国人、たくさんの方をお迎えする地域となっておりますので、オール防災として、ぜひ官と民の枠を超えた防災啓発活動への取り組みが必要なのではないかなというふうに感じておりますが、ぜひ今回この防災啓発活動においての学も含めて、産官学民、民も含めたところの連携についての展望をお聞かせいただければなというふうに思っております。かみかみで申し訳ないです。ありがとうございました。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。
それでは 2 名の方のご発言を受けて、知事よろしくお願いいたします。

（知事）
はい、ありがとうございました。Aさん、わざわざ松崎に移住してきていただいて、地域活性化に大変活躍をしていただいているということで、大変頼もしく思いました。経歴拝見したら電通にお勤めだということで、そうした電通でのご経験もかなり役に立つんじゃないかというふうに思いましたし、都会での生活経験があるということも、実はこれから地域の活性化に私は大事だと思ってまして。今こうした二地域居住とか移住って追い風でございまして、ご案内の通り、東京もう普通の人が住めない街になってきておりまして、マンション 2 億買えませんよね、普通はね。そういう中から、子育て世代を中心に、特に静岡みたいな首都圏に近接した地域に移住者が増えてきておりまして、こうした移住の促進だとか二地域居住とかですね、我々も大変重要だということで県も今そうした取り組みに力を入れているところでございます。
そういう意味では、Aさんのような方が地域で活動していただいてるっていうのは大変心強く

思っておりまして、色々また連携をしながら取り組みをしていっていただきたいと思いますし、すでにいろんなNPOの立ち上げとか、新しい地域コミュニティの活動拠点、海浜BASEというのをお作りをいただいて今活動されてるということで、我々も松崎町さんも含めて連携をしていきたいというふうに思います。
いくつかご提案もいただきまして、ブースター役を担うスタートアップ企業の誘致ということでございまして、実は今これ県のスタートアップ施策の一つとして、伊豆の温泉旅館とかホテルの空いたスペースを活用し、そこをリノベーションして、首都圏のスタートアップのサテライトオフィスを誘致しようとこういう取り組みを今始めてまして、やっぱりそういう人たちが来ると、かなりその人たちのいろんな知見とかノウハウで地域課題の解決とか地域の活性化に役立つということで。単に旅館の活性化だけでなくて地域の活性化にも繋がるということで、今そんな取り組みをしておりますので、ぜひ松崎や賀茂にもそういうスタートアップを増やしていきたいというふうに思いますし、空き家対策も非常にどこの地域でも頭の痛い大事な課題なんですけど、なかなかこれ進まない。やっぱり持ち主の理解をどうやって得るかってところが非常に大事で。私、浜松市長やってた時にも、広大な中山間地域にいっぱい空き家あるんですけども、なかなか貸してくれないっていうような課題にぶち当たりまして、これはやっぱり基本的には基礎自治体、市や町が一元的には空き家の問題に対して取り組むということになってますので、県としては、いろんなそのマッチングでありますとか、いろんな支援をやっていきたいなというふうに思います。ぜひこれからもよろしくお願い申し上げます。
それからBさん、子育て世代が防災に取り組むっていうのは素晴らしいというふうに思います。防災っていうのは、得てして硬いテーマのように思われまして、特に防災っていうとなんか男性というイメージがありますけれども、実はそうではなくて、女性の方とか特に子育て世代の方が参加をされるといろんなそうした皆様からの視点で、新しい取り組みが広まるんで。実は私、浜松が長かったんですけどね、市長が、浜松もぴっぴという、ご存じですか、子育て支援の有名なNPO団体がありまして、そのぴっぴさんが防災にも非常に力を入れて、今地域防災に積極的に取り組んでいただいてまして。やっぱりすごいですね、女性の目線でこういうことやった方がいいとかですね、いろんな提案が、かなり例えば避難所の運営なんかにも活きておりますので、そういう団体、県内どのくらいあるかちょっと分かりませんけども、そういう横の連絡みたいのも作るといいかなというふうにも思いました。
あといろんな団体との連携でございますけども、これは県も非常にここは重要だと思ってまして。大きな災害の時なんかこっちだこっちだと言ってられないし、行政自体も被災者になるケースが多いんで、やっぱりいろんな団体と常に日頃から共助の態勢を作っていくということが大事なんで。今県では、いろんな企業や団体とコラボした取り組みをしておりまして、昨年度民間企業や大学、NPOと連携して、企業防災×地域防災ネットワークというものを立ち上げまして。これ行政があれやれこれやれってじゃなくて、それぞれがやっぱり主体的にいろんな取り組みをするんで、その中から県の施策と民間の防災アプリ、これが連動するような仕組みが実現をしたり、参加者有志が新たな防災教育団体を設立をするとか、いろいろな今取り組みが出

てきておりますので、引き続きこうしたいろんな団体等と連携をするという取り組みも、県としてもしっかりやっていきたいというふうに思います。防災よく言われるように自助共助公助と、特に災害発生時は自助共助が大切だというふうに言われますので、特にこの共助の部分をしっかり取り組んでいきたいと思います。また引き続きよろしくお願い申し上げます。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。
それでは引き続き、参加者の皆様の活動内容のご報告を伺ってまいります。
最初にＣ様お願いいたします。

（Ｃ氏）
皆様はじめまして。南伊豆町で 20 年以上個人ボランティアとして猫の活動を続けておりますＣと申します。本日は私自身の活動を通じて感じている現場の実情と、県動物愛護センター「しっぽのバトン」の理念と運用についてお話しし、鈴木知事に見直しと改善をお願いするために参りました。これは私一人だけの問題ではなく、県内の多くのボランティアにも共通する課題だと感じております。本日資料 3 点ご用意させていただいております。
それではまず地域の現状からお話しいたします。事例紹介 1 ページをご覧ください。私が 23 年前、南伊豆町へ移住した際、地域には 50 匹近い飼い主のいない猫がおりました。「地域猫ゼロ」を目標に世話と管理、不妊去勢手術を続け、23 年にわたる取り組みの末、今年 6 月に遂にその目標を達成することができました。
しかし、地域猫をゼロにできても、猫をめぐる問題がなくなったわけではありません。事例紹介 3、4 ページをご覧ください。現在も私の元には遺棄された子猫の保護依頼が年間 30 匹あります。この数は 23 年間ほとんど変わっておりません。そのほかにも無責任な餌やりで増えた猫、高齢者の多頭崩壊や置き去りへの対応が続いています。猫の繁殖力は非常に強く、対応が少し遅れるだけで次の繁殖につながります。しかし、過疎地では動物病院が少なく、手術を受けさせる頭数にも限界があります。現場の努力だけでは対応しきれない問題です。だからこそ行政にも力を貸していただきたいと考えています。県が主導して、必要な地域に獣医師を派遣し、一斉に不妊去勢手術を行うなど、迅速に進められる仕組みを整えていただけますようお願い申し上げます。
そして地域で活動を続ける中で、行政の対応について強く疑念を感じた事案がございます。それが今年 5 月に南伊豆町の人気のない海辺で起きた全盲の猫の遺棄事案です。事例紹介 5 ページをご覧ください。何度も海に落ちている様子が確認されたため、命に危険が及ぶと判断し、町担当者立ち合いのもと保護し、動物病院に搬送しましたところ、緑内障による失明と診断されました。しかし、当時私の元には多くの保護猫がおり、この子の受け入れが厳しい状況でした。そこで、「しっぽのバトン」ならこの子の命を繋いでもらえると考え、賀茂保健所に相談をいたしました。

ところが、自活できようができなかろうが、いた場所に戻すのが決まりです、と告げられました。獣医師からも「目が見えず、元の場所に戻したら死んでしまう」と言われていると訴えても、遺棄現場を確認することもなく対応は変わりませんでした。さらには「収容するということは、処分になる可能性も承知の上で引き渡していただくことになる」という趣旨のことも言われました。本来なら行政に相談することで救えるはずの命が、頼ることで奪われてしまうのではないかと私は強い恐怖を感じました。幸いこの猫は現在は里親様のもとで穏やかに暮らしています。どのような障害があっても適切なケアと愛情があれば、幸せに生きられることをこの子は示してくれました。だからこそ知事にはこの事例を一つの例で終わらせることなく、愛護センターの理念と現場の隔たりを直視していただき、このような対応や発言が二度と繰り返されないよう、職員への理念の周知を徹底するとともに、各保健所と県衛生課に対する県としての指導を徹底していただきたいと思います。

事例紹介 6 ページをご覧ください。また施設には診察室、手術室、検査室の設備があると公表されている一方で、賀茂保健所の公式回答では「病気の診療や骨折の治療は行っていない」とされています。せっかく整備された重医療設備を、平時に限らず災害時にも動物の命を救うために活用し、必要な診療や治療がきちんと行える本当に機能する施設にしていただきたいです。また「しっぽのバトン」での猫の取り組みについても見直しをお願いいたします。公開情報では、令和 8 年 1 月から 9 月までに行われる犬猫管理イベント 76 回のうち、猫に関するものは 12 回、行政主導のものはわずか 2 回でした。猫に対しても必要な支援が受けられるような施設となるよう運営管理のあり方を見直していただきたいです。

ここまで地域の現状、全盲猫の事例、そして施設の運用についてお話ししてきました。これらを踏まえ、鈴木知事に 5 点お願いを申し上げます。第 1 に、犬と猫それぞれの特性に配慮した専門性のある管理体制を整えていただきたいです。第 2 に、猫の受け入れ基準を明文化して公表するとともに、関係機関へ統一して周知し、ボランティアが安心して相談できる体制を整えていただきたいです。第 3 に、愛護センターに備えられた設備が有効に活用されるよう、必要な診療や治療ができる体制を整え、運用を見直していただきたいです。第 4 に、不妊去勢の必要性について、県として継続的で分かりやすい啓発をさらに強化していただきたいです。第 5 に、小中学校における動物愛護教育を教育委員会と連携し、県内全域でより一層推進していただきたいです。

最後に申し上げます。「しっぽのバトン」という名前には多くの人が力を合わせて動物の命を繋いでいくという願いが込められていると伺っています。だからこそこの施設が理念だけでなく、現場においてもその役割を果たし、犬にとっても猫にとっても安心して命を繋ぐことのできる場所になってほしいと心から願っています。私たちボランティアは行政を責めたいのではありません。どうしたら一匹でも多くの命が救えるのかを共に考え、時には悩みながら力を合わせて取り組んでいきたいのです。現に南伊豆では事例紹介 7 ページにもありますように町とボランティアが情報共有をしながら連携し、猫問題に取り組んでいます。全国に誇れる県愛護センターとして活用され、静岡県が動物の命に真摯に向き合う県として胸を張れるよう、必要な

見直しと改善を進めていただくことを心よりお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。次にD様お願いいたします。

（D氏）
よろしくお願いします。初めまして。Dと申します。よろしくお願いします。自己紹介を交えながら今の活動内容と今後の展望とお伝えさせていただいて、知事とお話しできればなって思っております。
私自身去年まで東京都と東伊豆町の 2 つの拠点で活動をしていて、今年から東伊豆町の方にフォーカスを完全に移して、1 年間今地域おこし協力隊の移住定住という形で活動をしてます。元々東伊豆町を本当に知らない世界にいまして、出会ったきっかけが、伊豆半島で起業をされたスタートアップの会社さんと一番最初に、東京都ともう一個拠点を持ちながら活動したいんだよねってお話をした時に、あ、東伊豆町いいよって教えていただいて、実際に見に行かせていただきました。ちょうど東京にもまだ仕事が残っていたので、東京の仕事ともう一個何かできないかなってところで、地域おこし協力隊っていうものがあるよっていうのを知って、一つの仕事の選択肢になるかなって思って移住したのが一番のきっかけです。
その中で、元々私看護師を東京の方ではしてまして、看護師をしながら病院で働いたり保育園で働いたり、あとは医療系のライターとかをさせていただきながら、ちょうど 3 年前くらいに独立をして、移住のきっかけにもなってるかなってところであります。
その影響もあって今では、今の活動としては、看護師とか保健師のワーケーションの企業とか、ワーケーションの事業に取り組ませていただきながら、人材確保とか離職率に対してどのようにこう関われるかなっていうところを思ってやっております。
もう一つは伊豆の一泊二日の移住ツアーみたいなところも、さっき知事が横のつながりっていうところで、今すごい地域おこし協力隊の移住定住の賀茂の子たちがすごい仲良くって、Aさんにも協力を仰ぎながら、全体で移住ツアーをやっていこうみたいな取り組みもさせていただいております。なんかそんな形で地域おこし協力隊をさせていただきながら、あとは 2 拠点に関しましては、私自身すごい移動時間がやっぱ 3 時間くらいかかるので、結構ハードな面があったのかなって思いつつも、やっぱ伊豆半島に入った瞬間の海の景色だったり、東京のキビキビ感とこっちの暖かさみたいなところを両方とも感じながらやらせていただいてました。ただやっぱ金銭面だったり東京の家賃を払いつつ伊豆の家賃も払うみたいなところのハード面も結構厳しいなっていうのも現に感じていて。こういう地域課題と向き合う中で、2 拠点をしたい若者っていうのはたくさんいるかなって思う中で、何でしょう、体は一個で活動は二つでっていうところで、両方お金を払うとか両方やってかなきゃいけないっていうところも本当はサポートできたらなみたいなところはすごく思っていました。

あと、もう一つは医療職っていうところで、看護師さんの幸福度がどうやって上がるかなとか、離職率ってどうやって下がるかなっていうところも、常に考えながら今活動をしてます。やっぱ伊豆半島の人たちってすごく挑戦力があるなって私は思ってまして、一緒に挑戦できる力を蓄えながら、これからも住みたいとか住み続けたいみたいな町にしていきたいなって思いで活動してます。ちょっとまとまってないんですが、以上です。よろしくお願いします。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。次にＥ様お願いいたします。

（Ｅ氏）
西伊豆町のＥと申します。お手元の資料なく大変恐縮なんですが、今日は西伊豆町で取り組んでいるロケの誘致に関してご報告したいと思います。
私は今は西伊豆町観光協会の理事と、それからロケサポ西伊豆という西伊豆町でロケのサポートを行う町、観光協会、商工会、それから私は民間企業として連携しているロケのサポート団体の事務局長として活動しているんですけれども、私自身も 2021 年に地域おこし協力隊として西伊豆に移住してきまして、それまでは東京のテレビ CM の制作会社で映像業界で働いておりましたので、その経験活かして協力隊の現役時代からロケのサポートってところを行ってきました。2 年半前に卒業したんですけれども、そのタイミングで自分の会社を設立しまして、現在も町と連携する形でロケの誘致に取り組んでおります。
静岡県全体で見ると、県としてもそうですし、各市町さんも結構ロケの誘致に積極的なイメージがありまして、情報交換とかもしているんですが、西伊豆の場合は 2020 年にこの団体を立ち上げて、そこから本格的に取り組んでいるんですけれども。一つはもちろん観光誘客っていうところにも重き置いてるんですが、もう一つ西伊豆が大切にしてることはシビックプライドの醸成っていうところで。西伊豆に限らずこの賀茂地域って子供の進学だったり社会人になるタイミングでどうしても出ていく人が多いっていう実情があるので、この地域にいる間に自分たちの地元の魅力っていうのをいろんなメディアを通して知ってもらって、一度は出ても自分の誇れる町にまた戻ってくれるような子たちが増えたらいいなって思いで、私自身が学校に出向いて出前授業をすることもありますし、あとは 3 年前に西伊豆を舞台にした地域映画を作った時があるんですけど、その時も実際にセリフ付きのエキストラ役を募集して、実際の監督にオーディションしてもらうみたいなこともやって、ロケの現場を体験してもらうということもやりました。
もう一つなんですけれども、西伊豆で今使われなくなった施設のロケーションの利用っていうところにも力を入れてまして。具体的に言うと西伊豆町の堂ヶ島というところに旧蘭の里という元の蘭の植物園があるんですけれども、2013 年に閉園して、私が西伊豆にいた時に約 10 年弱ぐらいですね、一応管理はされているんですけど、人の出入りがないような状況が続いて、すっかり廃墟になってしまった場所があって、そこを映画の撮影をきっかけに今となってはも

うこの 4 年ぐらい使っているんですけれども、ミュージックビデオの聖地としてかなり使っていただいているような状態で。地主さんにも収益が入るような構成で、使われなくなった施設を蘇らせるってところを取り組んでおります。
ただここから先、本当は観光にもつなげていきたいってところがあるんですけれども、今もちろん一般の人は立ち入れない状態になっているんですが、やっぱり廃墟っていう特性上どうしても一般の人迎え入れようとすると、いろんな安全面だったりとか、維持の問題だったりとかいろんなハードルが出てくるので、この先に宿泊事業者の方たちと連携する形で聖地巡礼のツアーだったりとかできるようような仕組みを整えていきたいなと思いますし、おそらくそういう大小問わず、さっきの空き家問題もあったと思うんですけれども、使われなくなった建物の有効活用っていうところで県内でもいろんな課題抱えてるところもあると思いますので、情報交換しながら自分自身も取り組んでいきたいですし、何かその観光まで繋がるところとして西伊豆町としても何かモデルケースになるような動きができたらいいなと思って取り組んでおります。私からは以上になります。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。
それでは 3 名の方のご発言を受けて、知事よろしくお願いいたします。

（知事）
はい。まずＣさん、長い間保護猫活動で取り組んでいただいていらっしゃいまして本当にありがとうございます。ちょっと個人的な話をしますと、私も 20 数年前に死にかけた子猫を拾ってきて、3 年前に遂に亡くなったんですが 20 年間、家で飼ってた経験もございますし。実は浜松市長時代に動物愛護センターを新たに作ると。元々動物愛護センターってどちらかというと迷惑施設みたいな扱いになってたんで、それじゃダメだってんで、浜松の動物園に併設して作ったんですね。ですから動物園に来た子供たちや親子がその愛護センターに寄っていけるような仕組みにして、そこではボランティアの皆さんと一緒に譲渡会をやったり、ある程度の施設があるんでそこで避妊手術をしたり、命の教育っていうのをやったりしておりまして。市長時代もボランティアの皆さんと獣医師会と市が組んで、市も負担をしてですね、のら猫の去勢手術をして、できるだけそういう不幸な猫を増やさないそういう活動をしてまいりました。
今県のこのしっぽのバトン、富士市にあるんですね。ですから多分これ全県くまなくフォローするってなかなか難しい。だから逆に言うと浜松とか県西部の人たちは浜松の愛護センター行った方がよっぽど便利ですし、色々決め細かな対応もできると思うんで。あとなんか非常に役所的な門切り型の対応をしたということで大変申し訳なく思っておりますけれども。ぜひ私どもも、どちらかというと県の役割っていうのは全県的なそういう愛護教育をやっていくとか、あるいは市や町が取り組む取り組みをしっかりと支援をしていくとか、サポートをしていく、そういうのがどっちかというと県の役割になるんじゃないかなというふうに思いますし。先ほど南

伊豆町さんとしっかりボランティア団体連携しながら色んな活動されてると。やっぱりそういう基礎自治体とまずは連携してもらうのが一番いいんではないかなというふうに思いますし、県としてもしっかりそういう不幸な猫や動物が出ないように引き続き取り組んでいきたいと思いますし、そういうお役所仕事にならないようにしっかり職員にも伝えていきたいというふうに思います。また細かなことはまた追ってご回答させていただければというふうに思います。ありがとうございます。
それからDさん、東伊豆で活動していただいて、とってもいいとこですね東伊豆ね。スタートアップの方にご紹介をされたということでありますけれども、すごく我々も今二地域居住とか移住促進というものに取り組んでまして、ぜひ皆さんが主体的に東伊豆の地域おこしに取り組んでいただければいいかなというふうに思います。今空き家の活用なんかも、先ほどAさんの時もお話しましたけれども、市や町との連絡協議会作りまして、できるだけそういうものを活用しながら移住者や二地域居住の方が活動できる環境を作っていきたいというふうに思っておりますし、静岡県特に伊豆や東部はそういう活動にはもってこいの場所だというふうに思いますので、ぜひ引き続き皆さんと連携しながら取り組み進めていきたいと思います。
Eさんがロケのフィルムコミッションの取組みをしていただいてるということで、これも私、静岡県ものすごく可能性があると思ってるんですよ。市長時代も浜松フィルムコミッションというのを立ち上げまして、かなりイケイケの担当をつけまして東京の制作会社とネットワーク組んで相当ロケ増やした経験がありますし。熱海も有名ですし、静岡県はそういう意味ではフィルムコミッションの聖地になれると思うんで。今そういう協議会、プラットホーム、今県で作りまして、各地域のフィルムコミッションの活動を支援したり横のこの情報交換ができるような取り組みをしていきたいというふうに思ってますし。使われないような遊休施設をロケとして活用するとか。
今いろんな観光資源に実は伊豆半島ものすごくあるんですよね。これを活用すれば西伊豆今まで不便で大変なとこだってことでしたけれども、そんなことないんだと。西伊豆って海は綺麗だし富士山は綺麗だし、こんないいとこないなと。最近いろんなですね、ちょっと余談になりますけども、外から資本が入り始めてて。例えば土肥金山、鳴かず飛ばずの観光地だったんですけども、あれプロスパーという東京の会社が買収しまして、今あれをものすごい観光地にしようと取り組みを始めてまして。私も大変意気投合して我々も協力すると。いうことで、その近くでアースというすごいホテルができつつありますし、そういう人たちが今度逆に一緒になってこれからみんなで西伊豆盛り上げていこうよというようなですね。意外とそういう今よそ者の人たち、あるいは外部の資本も入り始めてて活動が始まってますんで。ああいうのもやっぱりうまく活用していく必要があるなと思ってまして、ぜひ色んな資源が集積をしている西伊豆地区でございますので、我々も県としてもしっかり取り組みをしていきたいというふうに思います。引き続きよろしくお願いします。

（広報戦略課長）

ありがとうございました。
それでは引き続き参加者の皆様の活動内容のご報告を伺ってまいります。
Ｆ様お願いいたします。

（Ｆ氏）
はい、こんにちは。有限会社渡辺水産のＦと申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。
弊社は本当ここから徒歩１分ぐらいのところに所在地を構えてる水産会社になります。創業が大正９年ですね、今年で 106 年目になります。私の高祖父が立ち上げた会社で、元々町の魚屋でした。天秤棒を担いで市場に魚を買いに行って、それを町の人に配るということから事業が始まりました。
現在の事業なんですけど、下田は金目の町として有名ですので、その金目鯛の魅力を全国に発信しております。主な事業が水産卸売業、これは伊豆周辺のホテル旅館だったりとか、静岡のホテルにも飛ばしたり、東京だったり神奈川にも飛ばしてます。金目鯛を中心とした商品を弊社の方で加工させてもらって発送するというような業務を行っております。続いて小売業、これは下田にて大正９年からずっとですね店舗を構えまして、町の魚屋という形で取り組んでおります。その次が出荷業、水産業って本当にいろんな種類が小分けにあって大変なんですけども、出荷業、これ何かというと、毎日下田に５トンとかの金目が水揚げされるわけですよ。じゃあその５トンを自場で消費できますかっていう話なんですね。これ全国各地そうなんですけど、有名な産地とされているところって出荷者っていうのが必ずついてます。水揚げされた魚をトンベースで買って中央市場、いわゆる豊洲だったり、静岡でいう流通センターとかにある市場に飛ばして、そこから市場が仲卸さんを介してもろもろいろんなところに飛ばしていくっていうような非常に重要な業務となってます。こういった面もちょっと担っております。あとはメーカー業ですね、下田で水揚げされた水産物を自社だったりとか県内の協力企業と製品を開発させていただきまして、それを全国に届けていくというような事業をやっております。あとは EC の方ですね、これはコロナ禍を機に始めさせてもらいました。
主な成果とすると 2024 年度、静岡県新商品セレクションっていうものに出させていただいて、そこで金目鯛ご飯の素という商品が最高金賞を受賞することができまして、知事の方にもその時にお会いさせていただいてます。その後、全国のふるさと良品コンクールっていうところで、なんと農林水産大臣官房長官賞っていうすごい賞を受賞させていただいて、そのおかげさまもあってこの製品どんどん、どんどん伸びていってるような形です。
ここまでが弊社の事業の紹介になります。この後はちょっと私が持ってる野望というか、どうやって次の事業を展開していきたいかっていうのと、現在の現状の下田の水産業の抱えている問題点っていうのを話させてもらおうかなと思ってます。
まず私は水産業っていうものはすごいかっこいいもんだと思ってます。でも一般的な認識はおそらくそうではない。なりたい職業として漁師、魚屋、まして出荷業なんて多分声が出ないと思います。これはしょうがないと思ってます。私もそうでした。私自身も水産業、魚屋大嫌いでし

た。高校生まで下田で育ったんですけど、なんとか正直下田を出たいな、兄弟 4 人いたんでお金かかんない大学で入ろうと思ってこう進んでいくぐらいしか考えなかったし、水産業っていうものなんかあんまりいいイメージなかったんですね。でも戻ってこう仕事をすると、一つ一つの仕事にはプライドもあって、やりがいもあって、かっこよさもあって、それって素晴らしいなっていうふうに感じました。だから水産業がかっこ悪いっていうふうにこう見られてる風潮を変えたいなっていうのが大きな私の野望です。

じゃあそのためにどうしていくのかなんですけど、水産業、先ほど言ったように漁師から魚をとって市場に並べて出荷する、それを買う弊社みたいなところもあって、さらにメーカー製造してホテル旅館があって皆さんの口に届くまで全て一貫してます。でも、この一つ一つの業者、仲悪いです。漁師と魚屋仲悪いです。僕は母方が漁師でした。父方魚屋でした。祖父仲悪いです。なぜかというと漁師高く買ってほしいですよね。魚屋安く買って高く売ったほうが利益になりますよね。昔はそうでした。今も僕下田の市場で仕入れやってます。漁師と仲いいです。漁師の船にも乗ってます。僕安く買い叩いたりしないです。なるべく、当然その買ったものに対してしっかりと付加価値をつけて、それをお客さんに提供する。それが弊社の仕事だというふうに自負してます。だから漁師が適当な処理でとってきた魚は逆に買わないです。というような形でどんどん、どんどんいいサイクルを回していきたいなというふうに考えてます。

ここで問題があります。漁師さん、高齢化してます。よくじゃあ漁師を増やそう増やそうって皆さん言ってるんですけど、じゃあ何が根本的な問題なのかなっていうと、参入障壁が非常に高い職業です。船、高いです。買えません。一般の人に。買えません。漁師になるには、みたいな各場所でルールがあります。3 年間見習いしなきゃいけない、それが終わってもその漁場に入るには上の人の許可がいるとかそういうしがらみがいっぱいあります。だからみんな漁師さんなりません。あと稼げません。それは相場が高くなってるとき安くなってるときで収入が不安定だから自分の子供を漁師にしたくない。だから漁師の子供は最近は漁師ならなくなってる。こういう問題は解決できるなと思ってて漁師を逆に個人事業主の漁師を雇用するのはどうだろうかとか、そういうことを考えながらやってます。

次が出荷です。下田がなぜ日本一なのか。船が金目を持ってくるから日本一なんです。それは今の下田の現状でその量の金目鯛をしっかり全国に届けるような土俵があるからです。これは出荷しかり市場しかり本当そうです。それが存在しなくなったらじゃあどうなるか。その船は下田港には入ってきません。他の港に逃げてしまいます。そうするとどうなるか下田の魅力がなくなってしまう。伊豆沖って本当に日本で有数の水産物が取れるいい場所なんです。黒マグロの、実は、本マグロですね水揚げ量、実は伊豆沖が一番多いんです。じゃあでも下田港に水揚げしません。どうするのか買い手がつかないから豊洲に直接持っていきます。そんなことがそんなバカなことがあっていいのかとか、最近本当に考えてます。だから私はこういった問題を一個一個自分自身の力で解決していって、下田という地域、静岡県の下田という地域で水産業っていうものがトータルで見てかっこいい事業。そこに携わる漁師、出荷業水産全てがかっこいいと言われるような事業を今後を作っていきたいなというふうに考えております。もし

この考え方にご賛同していただくことができましたら、何かしら一緒にディスカッションできればと思いますんで、よろしくお願いします。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。次にG様お願いいたします。

（G氏）
はい、皆さんこんにちは。私は河津町でペンション ビーチサイド 100 を家族と経営しております若女将のGと申します。よろしくお願いいたします。
現在当館では大変珍しいんですが、世界のカブトムシ、クワガタを約 40 から 50 種、500 頭ほど飼育をしておりまして、その飼育体験を組み込んだ宿泊プランに力を入れております。ありがたいことにこの取り組みは静岡県の経営革新計画にも選んでいただきまして、新聞やメディアなどにも取り上げていただきました。
私は宿泊業をさせていただきながらもう一つ、ダンスの指導と地域活動にも取り組んでおります。元々はダンサーとして活動しておりまして、以前は横浜 DeNA ベイスターズのオフィシャルパフォーマンスチームの diana のメンバーとしてプロ野球の舞台でチアダンスをさせていただいておりました。現在はその経験を活かして、河津町の子供たちと、下田市、南伊豆町の子供たちにもダンスを教えております。今年で 10 年目になります。2024 年には、結成された河津町の地域貢献プロジェクト、チアダンスチーム「GO KAWAZU」で、振付・監修を担当させていただいております。
「町を元気に！」を合言葉に、町内の様々なイベントに参加したり、沼津市で行われるアスルクラロ沼津の試合前のパフォーマンスでパフォーマンスをさせていただいたり、下田市では広島カープの秋山翔吾選手のトークショーや、徳光和夫さんのトークショーのオープニングアクトの演出も担当させていただきました。
最近では今年の秋、来園予定のコモドドラゴン、河津町に来園予定のコモドドラゴンをモチーフにした、ファンと観光客の皆さんも一緒に楽しめるダンスを制作いたしました。
そのほかにも共助型ライドシェア「河津ザクライド」では、宿泊業の立場で河津桜をはじめとする繁忙期、それ以外のシーズンですね、オフシーズンの特に夜間における交通の便の悪い河津町の課題解決に向けて、ライドシェアのメンバーとして宿泊事業者の需要の掘り起こしや、運営に対する提言を行ってました。
このように私は宿泊業とダンス、そして地域活動という、自分がこれまで経験してきたことを掛け合わせながら地域を盛り上げる活動をしております。今日はそんな私が宿泊業をしている立場から感じる河津町、そして伊豆南、南部の観光についての課題と、県にお願いしたいことをお話しさせていただきたいと思います。
まず一つ目は、情報発信への支援です。現在、賀茂地域では、観光客の減少が大きな問題となっていると感じております。私がペンションを経営している河津町にも、全国的に有名な河津

桜、河津七滝（かわづななだる）、今井浜海水浴場など、とても素晴らしい観光資源があるんですけれども、あと、「何もない、ただゆっくりできる」という魅力も持っている町だと思っております。
今の時代、観光 DX が進みまして、お客様を見ていると 8 割方がご自身で観光地の情報だったり、この宿の情報を8割方、キャッチしてご宿泊にいらっしゃる方が多くいらっしゃいます。「こんな素晴らしいところだよ」とか、それこそ「何もないけどゆっくりできるよ」っていうことでさえ、映像にして発信していかなければ届いてほしいお客様には届いていかないというのが今の課題だと思っております。
で、河津町には、大きいホテルよりも私たちのような家族経営の宿や飲食店、そういう小規模事業者が多い地域です。ところが、日々の業務に加えて、SNS の運用だったり、多言語対応、インバウンド対応、写真・動画撮影など、小規模事業者には負担が大きいのが現状です。そのような中、県がプロカメラマンの派遣だったり、SNS 講習、インフルエンサーの招致など支援してくださると効果が大きいと思います。
次に、観光客誘致につながるイベントの支援です。情報発信の課題と合わせて、観光客を誘致する取り組みにもご支援いただきたいと思っております。近隣の稲取などではキンメマラソンやレインボーディスコクラブのような大きなイベント開催時に、そのご家族が訪れて宿泊施設や飲食店も大きな経済効果が生まれています。
東伊豆町のイベントなんですが、正直おこぼれで河津町にも宿泊をしていただいたりしているのが現状なんですね。なので、河津町にも海、山、温泉、河津桜などイベントの舞台になるような魅力的な資源がありますので、地域主導で行う観光イベントにもご支援があったらいいなと思っております。
最後に、二次交通ですね、二次交通強化へのご支援もお願いいたします。現在河津町では、観光地にも関わらず 17 時以降、5 時以降にタクシーの運行がございません。信じられないことだと思うんですけど、河津では、河津駅まで来られても河津七滝まで行きづらいだとか、例えば下田市だったら、下田駅まで来られても白浜に行きづらい、南伊豆町に行きづらいなっていう、そういう課題があると思います。
本当に移動が大変不便だと思っております。全国的にも高齢者が増えて移動手段が困難になっている中、地域に目を向けるとバスの本数も本当に 1 時間に 1 回とか、2 時間に 1 回とかになって、タクシー不足もあります。「河津ザクライド」のような取り組みを、河津町だけでなく伊豆南部全体で、県が支援していただけるといいなと思っております。
以上、この3つについてぜひご一緒に考えていただければと思っております。私たち事業者もこの行政にお願いするだけでなく、自分たちでできることはどんどん協力して、挑戦していきたいと思っておりますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。
それでは 2 名の方のご発言を受けて、知事お願いいたします。

（鈴木知事）
はい、Ｆさんありがとうございました。素晴らしいですね。一貫したいろんな取り組みを、卸から小売ですね、出荷からまた最近は EC 販売も。
そういう取り組みをする中で、新しい魚屋さんとしてのビジネスモデルを構築をしているというのを大変僕は関心をしました。特にいろんな商品開発ですね、「金目鯛ごはん」もすごいですよね。いろんな賞を取られたということですけども、これから、そういうやっぱり今までの固定されたビジネスのやり方から、新しいビジネスモデルを作っていくっていうことがですね、大事だと思いますし。
それからその後半で言われました、やっぱり魚屋さんとか漁師さんとか水産業をもっとかっこ良くしようじゃないかと。これは僕は大賛成でですね、大きな野望だとおっしゃってますけど、Ｆさん、サスエ前田さん知ってますか。はい、焼津の。これもすごいですよ、カリスマですよね。彼がいっぱい、もう成生（なるせ）はじめ予約の取れないお店をどんどんプロデュースして、その店主が毎朝 8 時にサスエ前田に集まる。今日上がってきた魚をどうやってこれから料理しようかって喧々諤々議論してるんですね。すごい。××さんやっぱりすごいのは漁師さんとしっかり連携して、「こういう魚を獲ってきてほしい」っていうのをちゃんと漁師さんと連携しながら、多分そんなに買い叩いてないと思うんですね。だからやっぱりあれは一つの僕はモデル、かっこいいなっていうね。やっぱりＦさんも同じような魚屋さんだと思うんですね、ああいう人を増やしていければですね、水産業のイメージってガラッと変わってくると思いますね。ぜひだからＦさんとか、××さんとか、そういう人たちがトップを走って、そういう人たちを増やしていくことがひいては水産業がかっこいいというね、そういうことになるんじゃないかなというふうに思いますし、さっきちょっと漁師さんの参入障壁が高いという、よくわかります。僕の知り合いの小説家がいるんですけど、そいつがガッと一気に稼いで、節税どうするのかと。税理士さんに相談したら、実はその 3 年間、利益、稼ぎを平準化できるっていうのは、漁師さんと小説家だけなんですよ。なぜかというと収入が不安定だからですね。それくらいだからいろんな変動によって、やっぱりそこを安定化させるっていうのも大事ですし、やっぱり初期投資がすごく大事なんで、中古船の活用なんかもご提案いただいてますけども、そういうことも我々考えていきたいなというふうに思いますし。
金目をはじめですね、静岡県っていうのは本当に水産の資源の宝庫でございますので、これをこれからのガストロノミー観光にもつながる大切な資源でございますので、ぜひ一緒に連携して盛り上げていきたいというふうに思います。
Ｇさん、旅館業を継ぎながら、ダンスと地域活動で盛り上げると。共通して今日なんとなく皆さん感じるのは、都会から移住してこられたりとか、都会と伊豆で二拠点で活動されてる。これもこれからすごく大事じゃないかなというふうに思ってまして。特にＧさん、都会での経験もたくさんおありでしょうし、その時のいろんな知見っていうものが新しい商品開発とか活動に活きてるんじゃないかなというふうに思いますし、河津桜だけじゃなくてね、河津町ってい

っぱいいいものがあるんだっていうのを、それを発信する。今本当に SNS なんかでもですね、そういうインターネットを通じて発信をしてかないと、お客さん、特にインバウンドも含めて来ない時代なので、しっかりうちも専門人材とかですね、先ほどスタートアップの話もしましたけども、そういうスタートアップの力も借りながら、ぜひ発信を強化していきたいというふうに思っております。
またあれですね、移動の問題ね。これはね本当に、別にこの伊豆半島、賀茂地域だけじゃなくて、県内全域で今移動の問題っていうのが大きな課題になってまして。私、市長時代もですね、浜松に広大な中山間地域抱えて、もうどんどん路線バスがなくなり、どうするんだっていう中で、最後にいきついた結論が共助型。共に助け合う、そこからライドシェアっていうのを広めなきゃいけないってことで、実は仲間と一緒に市長辞めた後に「全国自治体ライドシェア連絡協議会」を作りまして、僕が初代の理事長なんですね。そこをベースに国交省、全国、総理、本庁に掛け合いまして、今全国にてすねライドシェアの事業が広がってきております。
私今知事になりましたけど、今は協会の方は別の方にやっていただいてますけども、ここが今いろんな地域のライドシェアの普及や、啓蒙活動に取り組んでまして。確か全自連が「河津ザクライド」、これも確か支援をしていたと思うんですね。今おっしゃるようにこれ一地域だけじゃなくて、広域でやっぱり運用したり、広域でドライバーを確保したほうが、例えばそのイベントの時期も違ったりですね、繁忙期が違うんで、もっと広域で運用したほうが効率的だし効果があるということで、今実はそういう取り組みをですね、始めてところでございますし、静岡県は私が提唱者ということもありまして、全市町 35 の市と町が参加をしていただいて、地域交通活性化協議会っていうのがありまして、その中にライドシェアの専門部会を作って、ここでいろいろ議論を進めておりますので。ぜひそうした地域間の連携、これからすごく大事、特に伊豆半島はもうやっぱり一つでやっていく必要があると思いますので、あの貴重なご提案だと思いますので、県としてもしっかり受け止めていきたいと思います。私から以上でございます。

（広報戦略課長）
ありがとうございました。
それでは以上をもちまして、知事広聴「やすとも知事と県政を語ろう」を終了いたします。
本日は誠にありがとうございました。